

初期フツサルにおける注意の問題

鈴木 康 文

序

我々は、日常生活の中で、ついうっかり「不注意」が原因で失敗することがある。その中でも深刻な問題としては交通事故で、自動車運転中の前方不注意により人身事故を引き起こし、その場合には、過失を犯したことにより責任が問われる。本来注意を払うべき状況のなかでそれを怠り、それが原因で大きい事故が発生した場合には、責任問題が生じる。その意味では注意と責任との間には明確な関係があることは、常識として受けとめられている。

ところで、実際に車の運転をしている人にとってはいわば常識であるが、運転中は、前方をいつも確認し続けて運転に専念していることはあまりなく、それなりに注意を払いながら、運転しているのが現状である（そうでないなら、運転を覚えたての時に路上運転に出たときのように、すぐにくた

くたになり、逆に注意が散漫になるだろう）。

また、近年の認知心理学で得られた知見でよく知られるようになった現象に、「変化盲」、「不注意盲」があり、その実験によれば視野に入っている（見えている）にもかかわらず認識されていないといういわば目が「節穴」のような状態が生じ、一般常識では推し量れないくらいに、われわれは知覚によつてはものを見ていないことが示されるようになってきた。^[1]

このように、知覚における注意／不注意については、常識とされていることと実体験には大きなギャップがあり、また責任問題に発展する事象についても、注意／不注意に帰することがどの程度妥当か再考を要する事態が予想される。

また注意が、たとえば知覚や想像のような特定の一作用ではなく、ある作用の下で機能しており、その働きそのものを対象として捉えられないことが、この問題を考察する困難さを増している。

本稿においては、フッサールの初期の知覚と注意に関する論考を分析して、注意現象を現象学はどのように捉えたのか考察したい（当然予想されることではあるが、フッサールは変化盲といった現象を取り上げていないし、そういった現象の存在も知らなかったと思われる。しかし知覚における注意がどのような機能を果たしており、それゆえ不注意がどのように見なされるべきかは分析を通して規定できよう）。

そのために、まず初期に出版された『論理学研究』（以下『論研』と略記、初版一九〇〇／〇一年、改訂版一九一三／二一年、フッサール全集第一八、一九巻）を資料にして、その知覚論を素描し（第一章）、さらに注意現象をどのように捉えていたのかを示す（第二章）。ただし『論研』においては、直接ある事物・対象を見るところという知覚において注意現象を分析していないので、ここでは、フッサールの注意の位置づけについての確認にとどまることとなる。

次に、一九〇四／〇五年になされた『知覚と注意』講義録（全集第三八巻）を資料として、知覚における注意機能の概略を考察する。フッサールは注意を大きく思念としての注意と関心としての注意に区分しているの、第三章において、まず前者について概説し、特に思念と統握の区分から知覚における注意の役割を明らかにする。そして第四章においては、知覚における関心の機能を明確にして、さらに思念と関心と

がいかにか知覚における対象認識に寄与しているかを示す。以上により、注意に関してもたれる、暗がりのなかでスポットライトを当てるという比喩的なイメージが、注意現象を語るにあたって不十分で、場合によっては弊害をもたらすことを導く。

第一章 『論研』の知覚現象の分析について

『論研』は、知覚現象について、二つの方向から論述している。ひとつは、書名の「論理学研究」から推察できるように、判断論を論じるためのいわば手引きとして導入され、その際、表現された内容がそのまま知覚され認識にもたらされる現象を議論している（そこには、知覚における名辞、命題が取りざたされる）。もうひとつは、知覚において認識が成立する条件とその意識の状態を記述することであり、感覚与件が事物認識としていかに成立するか（すなわち対象の構成）が論じられる。前者は、表現によりあらかじめ意味が与えられ、それが知覚によって認識に至る。それに対して、後者は与件を介した認識の成立が問われる。

本稿で主題とする「注意」問題は、『論研』では前者の議論のなかで登場し、そのなかで注意現象が分析される。それゆえ本来、本稿で問われるべき（外部）知覚のなかでの注意

現象は直接的には扱われていない。しかしその分析により、注意の一端は示されることとなる。

まず、知覚の言語的表現から出発してみよう。フッサルが事例として述べている書かれた文字表現から考察を始める(H.XIX/1 45f. 420f. 558f.)。たとえば、「インク壺」と書かれた記号表現は、紙に書かれたまさにインクのシミであり、それをまずは物理的なものとして知覚している。しかしこの表現を表現としているのは、記号としての意味であり、意識の作用としては意味志向においてその意味を理解している。さらにこの表現は、文字通りただ意味を表しているのではなく、現実の対象物としての「インク壺」への関係をも示している。表現は、ただ表現されるのではなく、対象に対する志向的關係を有する。

さらにこれにたとえば知覚(作用)などの直観が関わる。実際に目の前にインク壺を目にすることによって、認識に至るわけである。これは単に志向されているだけではなく、「充実」(Erfüllung)されると言われる。

また知覚したものがインク壺だったと思ったが、よく見ると、それがキャンディ箱だった場合、それは「的外れ」だったこととなり、認識がなされなかったことになる。

それに対して、たとえば、「丸い四角」という表現は意味としては理解されるが、実際に知覚することはできないし、

しかもそれが知覚され得ないことは、その「円い四角」という意味自身が規定している。認識しえない、つまり意味充実されえないことは、意味自身が、対象への関係性、意味充実の仕方でも規定していることになる(H.XIX/1 59f.)。

また知覚作用など直観は、あくまでも意味を規定する作用であり、意味を内蔵する作用ではないことに注意しなければならぬ(H.XIX/2 552)。これは、たとえば見られた対象を(それを見ることのみで)、さまざまに表現可能であり、多様な意味的な規定が可能であるからである。

こうして表現を介した知覚による対象認識には、記号表現、表現された意味、その直観、意味と直観の合致による認識の成立が、その中に含まれる。

フッサルは、この事態を整理している箇所があるので、以下それを使って概説してみよう(H.XIX/2 624, vgl. H.XIX/1 474)。

表意作用や直観作用は、客観をを目指すので「客観化作用」と呼ばれる。直観作用はさらに知覚、想像作用などに区分される。この客観化作用が対象に関係する仕方はまず、(1)作用性質(Aktualität, Qualität der Akte)と(2)作用質料(Aktmaterie)(あるいは代表象(Repräsentation))の契機に規定される。

(1)作用性質は、作用が措定的か、非措定的かを規定する。

信憑なのか、あるいは懐疑なのか、願望なのか、あるいは保留なのか、その様式のことである。それに対して(2)作用質料・代表象は意味に関わるが、(a)統握形式(Auffassungsform)、

(b)統握質料(Auffassungsmaterie)、(c)統握された内容(die aufgetasteten Inhalte)の契機を含んでいる。(a)

統握形式は、対象が表象される仕方の中で、表意的か、直観的か、あるいは両者の混合した仕方では表象されるかによる。

(b)統握質料は、対象がどの特定の「意味」で表象されているか、ということと同じ対象が、異なる意味で規定されることによる(「統握意味」とも表される)。(c)統握された内容は、対象が、どの記号、あるいはどの呈示的内容(die darstellenden Inhalte)によつて表象されるかということ、後者はいわゆる感覚内容・ヒュレーを指している。

フッサールは、このように作用の構成要素を区分した上で、さらにすべての客観化作用が代表象を内蔵しており、またどの作用もそれ自身ひとつの客観化作用であるか、あるいは客観化作用に基づいている、と規定している。

第二章 『論研』における「注意」現象の分析

以上『論研』における知覚、表意などの客観化作用に関する諸契機を簡単に規定した。

注意現象については、フッサールは、表現された意味の問題(第一、五、六研究)と抽象と注意の問題(主に第二研究)という二つの事象を分析するなかで議論している。

(a) 表現された意味のもとの注意

まずこの表現された意味のなかで、「注意」現象を分析してみよう(H.XIX/1 420f.)。

たとえば、先の事象のように、紙の上のインクで書かれた記号(シミ)を見たり、あるいは(単なる音ではなく)語音を聞いたりして、その意味を理解しているとしよう。この場合、インクのシミ自身は、物理的な客体でありそれを見るが、さらにそれを介して意味が与えられている。ここには表現と意味付与作用とを両方包含し結合する作用が働いている。しかも日常的には、あくまでもその意味理解にいわば意識が向いている。この複数の作用の結合のうちで、ある作用の遂行に没頭することが、「注意」であり、それはまたある対象に注意を払っていることでもある。

フッサールは、この注意をある作用とはみなさず、ある作用の遂行状態として作用に属する「際立たせる機能」(eine auszeichnende Funktion)であると規定している(H.XIX/1 423)。これは上述した事例においてもまずは表現と意味付与作用が機能しており、その作用の存在のうえで、注意がなさ

れるからである。注意自身がいわば一作用として機能しているわけではない。

またこの事象においても、たとえば注意を向けかえ、たとえばインクのシミに着目することも可能であるし、あるいは意味付与作用それ自身に注意を向けることもできる。この複数の作用の内である作用を優先させることが注意の特質とされる。またただ後者の場合は、作用そのものをいわば対象として規定しそのうえで注意（関心）を向けている。つまり注意しうるのは、何らかの作用の志向的な対象だけということになる（H.XIX/1424）。

（b）抽象と注意

またフッサールは、『論研』の第二研究において抽象と注意に関する唯名論的解釈に対する批判から、注意概念を分析している。

フッサールによれば、抽象概念は二義的であり、混同されているとされる。ひとつは注意による際立たせという意味であり、もうひとつはスペチエスを把握することで「イデー化的抽象」と表現される（H.XIX/1166）。

注意による際立たせとは、事物の色や形、たとえばチョークの赤色などは、具体的な部分ではないにもかかわらず、それに着目し、それに焦点をあわせることで「赤色」として捉

えることができる（赤色そのものは、チョークという物から分離することはできない。それをあえてそれに着目することから抽象ともいわれてきたわけである）。それに対して、イデー化的抽象とは、その見られている赤いチョークといった個物の直観から、「赤色」というスペチエスを把握することである（経験から抽象を通してスペチエスとしての意味が生じる。最初の注意による際立たせも、実は、赤色を捉えていることを踏まえているので、イデー化的抽象がすでになされていることとなる）。

フッサールはここで英国経験論を批判し、本来的な抽象の機能を捉えることを本題とし、それに付随する形で注意概念を扱っている。そのため、注意について、網羅的にあつかっていないが、着目すべき点を二つ指摘している。

ひとつは、その機能の拡がりの大きさである。もうひとつは、際立たせという表現から推測されるスポットライトという比喩について、若干距離をおいていることである（彼自身は照明を当てるといった比喩も用いているし、後の著作『イデー』I（1913）においても、注意について「照明する光」（III/I 213）とこの比喩に一定程度その有効性を認めている）。

ひとつめの指摘であるが、注意自身は、直観されたもの（注意が働くばかりではなく、思考されたものにも及ぶとしている。思考されたものの事例としては、ルネサンス文化であ

るとか数学的な事例も挙げており、つまりは、注意は何らかの諸作用を遂行させているときに、その対象としているなかで、あることを優先させ集中させていることを意味している。注意し気付く機能としては、すべての直観作用や、思考作用を含むすべての表象作用の全領域に及ぶこととなる (H. XIX/1 168)。

もうひとつの指摘であるが、フッサールは、注意を「照明し際立たせる機能」(eine erhellende und pointierende Funktion) と見なすならば、それは狭すぎるだろうと述べている (H. XIX/1 169)。

対象が意識に対象として意識されるのはそれが意識に、「対象的志向によって初めて構成される」からであり、心的内容として現存しているからではない。心的内容も、それ自身が対象化するには、思念が必要であり、それは「注意されて初めて」思念されることとなる。「注意する働きは、その内容を目指す働きとしてまさに一種の表象作用」といわれる。注意は対象化するさいの志向作用の一翼を担っており、その機能のもとで初めて対象構成が成立する。これは、逆にいうといわゆるスポットライトという比喻だけでは、注意機能が記述しえないことを示していないだろうか。あらかじめすでに対象がどのような状態であれ成立しており、注意はそれにいわば照明を当てることによって対象が強調され、確実にされ

るというように受け取るなら、対象を捉えそこなっていることになろう。

このような問題について、『論研』出版後のフッサールの注意論の展開を、講義録『知覚と注意』を使って探究してみよう。

第三章 『知覚と注意』——思念としての注意

『論研』により、フッサールの注意概念の概略や枠組みが確認された。

しかし特に本稿で課題としたい外部知覚における事物認識に働く注意については、『論研』では十分に展開していない(知覚自身は主題として論議されているが)。

この課題については、『論研』刊行後行われた講義(『知覚と注意』という講義録)にその分析がなされている。特にフッサールは知覚において、注意を、「思念(すること)」(Meinung, Meinen)としての注意と、「関心」(Interesse)としての注意に焦点を絞って論述しているのでそれにしたがって考察を試みる。

ただし、思念という概念については、多義的に用いられていることや、『論研』とは力点が異なること、あくまでも注意がさまざまな作用の遂行状態であること、それゆえ思念と

言ってもその思念における様態として注意が述べられていることに留意しなければならない。

最初にサイコロを事例として事物知覚を考察してみよう(H.XXXVIII 26f.)。

目の前に完全に静止しているサイコロを見ているとする。しかし実際に目にしているのは、あくまでもその(立方体としての)サイコロのその前面にしかすぎず、その裏面については隠れたままである。つまりわれわれは見られた前面を通してサイコロを見ていることとなる。意識に与えられ体験されているのは、その前面であるが、さらに実はそれも意識において体験されている感覚内容(色彩体験)を介して、当の色彩体験をサイコロの前面として規定していることになる。

この対象を逆に感覚からみてみると、多様な感覚は統握(Auffassung)されて、ある対象の契機となる。知覚によって、体験されたさまざまな感覚が単にそれにとどまらず、それを超えて対象の内容となるわけである。統握については、この感覚を対象と化し生化する(Beseelen)という統握性格(Auffassungscharakter)と、その統握された意味内容としての統握意味(Auffassungssinn)の二契機に区分される。これは先に述べた『論研』の統握形式と統握質料に対応していると思える。

知覚は、物の側面について実際に見られたり、あるいは隠

れたりしながらも、同一の事物として見られ続けている。この見え隠れという点で、見えている側面は、本来的に現出しているが、見えていない側面も、見えていないという仕方、一定程度規定されており、対象化されている。この見えていない側面については、なるほど感覚としては直接現前していない。しかし感覚された内容が、一方では前面として現前しているだけではなく、隠れた側面を隣接(Kontiguität)関係において、いわば記号として示している(H.XXXVIII 35)。フッサールは知覚において、この統握にかかわる概念として、思念、および「性質」(Qualität)を規定している。

性質は信念性格のことで、対象の存在が確実であるのか、それとも疑わしいのか等々、存在に対する信念で区分される。それは対象の側からするなら、存在性格に対応する(H.XXXVIII 13. 15)。

思念は、それ自身は多義的に使われる概念で、もつとも広義に解されると、ある対象を思念するということは、それを志向しているということであるので、志向性と同義になる場合もある(H.XXXVIII 73)。ただし『知覚と注意』で論述されるのは、特別な思念としての注意ということで、ここで課題としている(ただし、思念作用がそのまま注意作用であるとする点は、保留とすべきだろう)。

知覚においては、思念することは、統握作用よりもより高

次であり、統握を前提として思念が形成され、統握なしには思念なしといわれる (HXXXVIII 81)。

そして思念作用が初めて統握作用に自立性の性格を与える。すなわち注意を通して初めて我々にある対象が自立して (für sich) そこにあると認識される (HXXXVIII 116)。

知覚対象については、統握は対象の意味規定としてその一般的な統一性を与えるのみであるのに対して、注意としての思念があつて初めて、対象物のその対象物としての独立した認識が成り立つこととなる。思念は「同一性の統一」のもつて一致し、思念の充実 (つまり対象がそれだけで自立していることの認識) は、自己所与性の意識の基に伏在している (HXXXVIII 119)。

統握の領域は、特別な思念である注意の領域を超えて到達する (HXXXVIII 121)。ただしその場合、対象については未規定のままにとどまっています、ある類型性を示していることになる。思念はそれに加えて、境界付けする働きを担っており、際立たせ、規定し、まさにそれによって対象の自立性が成り立つこととなる。そのため統握された内容について、それが変わらないままで、思念は変換することも可能となり、焦点を当てることによって、その対象認識も変換することとなる。たとえば、見られたサイコロについて、注意を巡らしたりしてより詳細な規定がなされたりすることがなされるわ

けである。こうして、思念としての注意は、知覚の明晰判明性を生み出すこととなる (HXXXVIII 97)。

また思念の特徴としては、強さ・強度をもたないことである (HXXXVIII 118)。対象に着目し、配意するときに、それに対する集中度が関与する。しかしフッサルによれば、この集中度に関与するのは、関心 (としての注意) であり、思念はそうではない。思念はあくまでも対象の独立性・それだけで存在しているという認識に関わる機能である。それとともに思念は、欲求などの感情の基礎をもたず無縁であることが言われる。

なお思念としての注意という表現であるが、やはりこれは誤解を招きやすい。思念の一類型として、注意が規定されているわけではない。つまりあくまでも注意自身は志向性の一作用として規定されてはいないことになる。

以上の注意論の特徴としては、知覚の対象認識のなかに思念としての注意と統握とを区分していることである。思念としての注意は、境界付け作用をもち、それによって初めて対象が対象としてそれ自身として、対象認識が成立する。すなわちこれは、統握のみの場合は、類型的な把握がなされ意味的な規定が成立していても、なお対象として認識が成立していないと解釈できる。つまり統握されているだけで注意がされていない状況も状況として十分にあり得るわけで、その際

には「見えども見えず」という事態が生じることになる。

またすでに本稿第二章でも示唆したが、この解釈は、また注意についてのスポットライト説に対して限界を示すことになる。注意のスポットライト説は、ある種の比喩でありフツサルもそうした表現を使っている。すなわち、ある対象に注意を向け、それによってその対象がより明確に認識できるようにになったりするというわけである。しかしフツサルの知覚における思念と統握機能の区分の分析により、思念としての注意は、実は対象そのものが注意によって初めて認識され規定されるというものであり、対象認識そのものの成立の条件として位置づけられているのである。それゆえ思念としての注意がなされる前には、対象は対象として規定はされていないことになる。⁽⁴⁾

第四章 『知覚と注意』——関心としての注意

注意に関する機能としてフツサルは、思念の他にさらに関心を挙げている。

フツサルの記述した事象である、クリスマスに書店にいった事例をもとにして考察を進めよう (HXXXVIII 115)。そこにはきらびやかな書籍が並んでいて、楽しい気持ちを感じさせている。そこにある一般的な欲望 (Begehren) をも

つことになるが、同時にある本を手にとると、そこにある特定の規定された欲望関心を示すことになる。その場合、最初の一般的な欲望関心は消失することなく、そのまま維持される。

この事象から注意としての関心を導き出すことにしよう。まず関心は、欲望や感情 (Gefühl) 等と直結していることである。

またここで欲望関心がどの方向に向くかによって、前景と背景の区分がなされ、それが知覚において推移することを示している。

ある対象に対して、関心を向けそしてそれを認識するというなかには、「志向ー充実」という枠が成立しているが、充実されていない願望はある種緊張 (Spannung) があり、それに対して充実した場合には、弛緩 (Lösung)、充足がやってくる。ここにはある種のリズムが形成しており、そのリズムから受け取る感情が、関心についての本来的原動力と源泉となっている (HXXXVIII 107)。フツサルは、ここでは感情によって対象認識までがいかに導かれるかといういわゆる受動的なレベルから論述している。つまりこれはすでに認識された対象について、何らかの感情を抱くという能動的な次元で論じてはいない。そしてこの関心は「気付きの作用を促す力」(HXXXVIII 108) ともなっている。すなわち関心

を持たれ、注意を引きつけ、関心がある方向性を方向付けて焦点を当て、そしてそれが結果として気付きを生み出していくこととなる。

ただし、関心としての注意は、こうした焦点化にとどまるわけではない。

先述の事象で述べたように、ただ関心が、ある対象に向いていたとしても、それだけでなく、以前もたれていた関心がいれば継続し、そのまま一定の傾向として残り続ける。そして我々がいわば、関心を別の方向に切り替えることができるのも、この背景化した関心による。

関心自身は、心情の作用 (Gemütk) に基づき、その充実はある種の満足感による。つまり関心を持ったものが実際に知覚され認識されるとそこに満足感が生じ、そこには、一定の強度があることが確認される。より強い関心と関心をもった客体に対するさらなる集中が生じたり、逆に充足とともに関心が薄らいだり、あるいはべつの事象に関心が移ったりする。

ところが、先に述べた思念においては、その充実において強度をもたない。それに対して、関心はこの強度をもつことが思念との大きな差異となる。それはまた集中力が関心にかわり、思念については関わないことと同義である。

また関心はなるほど認識への欲求の原動力となっているが、

知覚・認識には関わないことになる。知覚は、それによって対象の自己所与性を呈示し、充実を導く。それがすなわち対象認識の成立であり、その自立性の確定に関与する思念は、認識の妥当性に直結する (明晰判明)。しかし関心のほうは、あくまでも認識を促し呼び覚ます力であるので、知覚自身には関与しない。

ただ関心は、快 (Lust) と同根というわけでもない。なるほど快がいわば関心に働きかけ、またその持続性を訴えることがある。しかし快そのものには、注意の関心と常に結びつけるものではない。関心と関わりなく快が生じることもあり、また快を伴わない関心により認識が促されることもありうる。それゆえ両者の関係に必然性があるといえない。

最後に、注意としての思念と、関心との関わりを考察しよう。

関心は認識における「気付くことを促す力」(H. XXXVIII 108) と規定された。フッサールは、思念されたことと気付かれたことを同一視している (H. XXXVIII 117) ので、ならんかの関心によって知覚において対象認識が促され、それに基づいて実際に認識が形成されると、それは気付きが成り立ったことを意味する。すなわち対象に気付いたということは、対象が思念されたことであり気付きの成立を意味する。このような意味では、認識の原動力としての関心とその成果

としての気付かれた対象認識に、関心と思念が常に関わっていることと確認される。

しかしそのことは逆に、関心が向けられない方向においては思念されることもなく、そもそも対象認識が成立しえないと思われ、ただ習慣性のなかで一定の類型性が保持されているにとどまることとなる。この解釈は従来表象理論を批判し、さらにたとえば変化盲のような事象が成り立ちうることを示すものとなる。

結

我々は、初期フッサールの著作と講義録を資料にして、彼の注意に関する考察を辿った。

それによると、注意は志向性のように方向付けをもつが、しかし志向性とは異なり、あくまでも際立たせという機能であり、知覚を含めさまざまな作用の形態として捉えられるものであった。またそれは際立たせということから、抽象作用とも異なっていた。

ただ注意するという一般的な表現から類推されるようなスポットライトをあて際立たせるといふ機能だけでは不十分であることも示された。すなわち注意の機能によって初めて認識されるべき対象が対象として境界づけられ自立的に規定

されるのであり、もし注意されていない場合には、その自立性をもたないまま捉えられることとなる。

これは注意される前から対象は規定され、それが注意によってより明確化されるという一般通念とは大きく異なるものである。注意をスポットライトに喩える比喩も、意識（眼差し）をそちらに向ければ、注意が働いていると見なすならば、それだけでは事物の認識は成立していないので、それは誤解を招くことになる（それゆえ、それをただちに不注意であるとし、そこに責任の所在を認めることは早計となる）。そしてこうした注意説は、冒頭で記述した変化盲から導かれる新たな知覚説につながるものとなる。

この新たな知覚説は、フッサール後期の、関心を触発するヒュレーの受動的総合の問題、およびそれに寄与する身体のカネステーゼの機能から探究する必要があるが、これはまた稿を改めて考察しなければならない。

註

フッサール全集からの引用は、巻数はローマ数字で、頁数はアラビア数字で、本文中に割注で示す。

Husserliana, Edmund Husserl Gesamte Werke
Bd. III/1: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und
phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch: Allgemeine

Einführung in die reine Phänomenologie. Neu hrsg. von Karl Schumann. I. Halbband. Nijhoff. 1976.

Bd. XIX/1 Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Erster Teil. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis.

Hrsg. von Ursula Panzer. Nijhoff. 1984.

Bd. XIX/2 Logische Untersuchungen. Zweiter Band. Zweiter Teil. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis.

Hrsg. von Ursula Panzer. Nijhoff. 1984.

Bd. XXXVIII Wahrnehmung und Aufmerksamkeit. Texte aus dem Nachlass (1893-1912). Hrsg. von Thomas Vongehr und Regula Giuliani. Springer. 2004.

(1) 変化盲の例としては、シモンズ&レヴィンの行った、道を尋ねる人が途中で入れ替わるが尋ねられた人は気付かないという実験が知られる。

<https://vimeo.com/81039224>

不注意盲の事例として、シモンズ&チャプリス「見えないゴリラ」の実験がある。これは、被験者がある課題を与えられて映像を見るが、途中でその画像にゴリラが登場するものの被験者の約半数はそのゴリラにまったく気が付かないというものである。

<https://www.youtube.com/watch?v=JG698U2Mvo>

(2) ついでにはバークレーとヒュームに関するフッサールの批判をとりあげる。

バークレーについては、たとえば、紙に書かれたある三角形から内角の和が二直角に等しいということを証明する事例を考えてみよう。フッサールによれば、バークレーは、その証明はその特殊性を無視することができ、そこに抽象がはたらいて、任意の三角形についてその証明が成立するとする。しかしフッサールは、バークレーのように考えた場合、描かれた個別の物理的三角

形からやはり個別の三角形のことが導かれるだけで、そもそも普遍的な幾何学的命題は適用できないとし、「抽象の基盤と抽象されたものを混同している」と批判する (H. XIX/1 160f.)。

ヒュームに関してフッサールは、彼はバークレーに依存し、その説をさらに心理学的に深めようと試みた、と解している。すなわちたとえば、個別観念がいかんして代表機能を果たすか、といった課題である。ヒュームはそれについて習慣にその根拠を求めるが、しかしフッサールは、それによって普遍性は導かれることはないとしている (H. XIX/1 190f.)。

認知科学の知見によるものだが、対象とその網膜像との対応関係は、一対一の対応ではなく、一対多の関係になっている。それゆえ目に映る多様な網膜像から推定される対象そのものはその網膜像だけでは一義的には定まらず、一定の拘束条件が必要となり、また網膜像からの飛躍と解釈が必要となる。フッサールの課題としているところも、こうした課題を辿ることにある。

神崎繁『プラトンと反遠近法』新曜社、一九九九年、二三頁。

ピンカー『心の仕組み』上、ちくま学芸文庫、二〇一三年、三三頁。

(4) ベグーは、注意の方向性から、それを、対象そのものの、その周囲の対象、さらに背景の三種類に区分している。ただ、最後の背景のみ、注意の眼差しの問題が発生すると解釈しているが、事象としては明確でわかりやすいものの、実は対象そのものについても注意において関わり合う問題で、フッサールはそれを注意と統括の問題として区分しているといえる。

また注意のスポットライトという比喻については、注意が、知覚ばかりでなく想像、記憶等々に関係しているために不十分としているが、本稿で述べたようにこの比喩は対象の知覚においても誤解を招きやすいといえる。

Bégout, B.: Husserl and The Phenomenology of Attention, in:

Rediscovering Phenomenology, hrsg. von L. Boi, P. Kersberg
und F. Patras, Springer, 2007, p.19ff.

※本研究は、J S P S 科研費 15K02025 の助成を受けたものです。

(すずき・こうぶん 石川工業高等専門学校)